

南源恭薫の臨濟録抄と天徳寺資料について

安藤 嘉則

On the “Rinzairoku-shō” of Nangen Kyōkun and the manuscripts in Tentokuji

Yoshinori ANDO

一、はじめに

中世禅林においては『碧巖録』や『臨濟録』などが盛んに提唱され、その講義録としての抄物文献が数多く成立している。この抄物という一連の文献群は禅門ばかりではなく、儒家・神道家・医家などの中世の学問を支えていた各分野に共通して見られるが、特に禅門・博士家において盛んであり、国語学における中世口語研究資料として注目されてきた。

平成十三年度の本学研究紀要の拙稿「中世禅宗における語録抄の研究―『臨濟録』の抄を中心に―¹⁾」において、筆者は『臨濟録』の抄物について、五山派系二点、大徳寺派系九点、曹洞宗系三本について写本・版本のリスト作成し、それぞれ資料紹介をしたのであるが、このたび北鎌倉の松ヶ岡文庫所蔵において新たに南源恭薫（天徳寺〔愛媛県

松山市）中興開山（元和八年〔一六二二〕寂）による「臨濟録抄」（以下「南源臨濟録抄」）を見出したのでここに紹介検討する次第である。

この「南源臨濟録抄」は中世末から近世初頭にかけて撰述された多くの臨濟録抄の中で妙心寺系の特徴を有する文献であるが、その冒頭に天徳寺の由来に関する記述が含まれている。内容は天徳寺創建に関すること、妙心寺開山関山慧玄と天徳寺中興に関すること、あるいは中世の伊予地方の戦乱による天徳寺の興廢に関することなどであり、この「南源臨濟録抄」は単に語録抄研究にとどまらぬ重要な資料であるといえるであろう。

平成十九年九月三日に筆者は松山市天徳寺にてご住職の曾根弘全師ならびに副住職の曾根弘充師のご高配を得て天徳寺関係資料や南源恭薫の語録・年譜資料などを調査することができた。本稿では、こうし

た松山天徳寺所蔵の諸資料も参照しながら、この南源恭薫による「臨濟録抄」の冒頭の記載事項について検討することにした。

二、南源臨濟録抄の位置

この南源恭薫による臨濟録抄については、これまで取り上げられたことはなく、恐らくその存在すら知られることなく今日に至つたといつてよいであろう。『新編禪籍目録』でも取り上げておらず、松ヶ岡文庫の目録では、「南源和尚教衆」（架蔵番号、ハ一三二三）とあるのみで、表題からはこれが臨濟録抄であると認識できない。しかるに原写本を閲覧してみると、青緑色の原本表紙の表紙左端に「南源和尚教衆」と墨書されて、その「南源」の二文字の横に小字で「臨濟録抄」と朱書されている。表紙見返しには「宗悦」と押印されるが、これは柳宗悦の蔵書印であり、本書が柳宗悦によつて松ヶ岡文庫に寄贈された写本の一つであることがわかる。

また奥書には南源の自筆で「臨濟録抄 下 墨付 九十七丁」とあり、続いて「此臨濟録抄壹部但分之為上下二卷者也。於豫陽松山城下江西山天徳寺書焉。筆者、又澤柱越桂茂菴充巨、此九人之禪侶也。上卷亦此衆也。慶長十七年壬子四月十日南源恭薫記之」と記されている。

つまり本写本は伊予松山の天徳寺にあつた南源恭薫が慶長年間に『臨濟録』を講義提唱し、これを会下の九人の僧によつて書写せしめて成立した写本であることがわかる。実際写本を調査してみると複数の筆致が認められ、会下が分担して筆録していることが確認される。

このように提唱を行った僧（撰述者）が奥書に筆録者の僧名を明示しているのは珍しいケースであり、本写本は一群の抄物文献がどのように作成されていくのかを示す貴重な資料といえるであろう。ただ残念なことに本抄は下巻のみであり、完本ではない。

三、南源恭薫と伊予天徳寺について

ところで南源恭薫は伊予地方で活躍した臨濟宗妙心寺派悟谿宗頓下（東海派）の僧であるが、『正法山宗派圖』（万治本）では東海門派の項に次のような法系が示されている。

○大徳獨秀乾才―妙心仁岫宗壽―特賜大通智勝國師妙心快川紹喜―

特賜定慧圓明國師妙心南化玄興―妙心湖南宗岳―妙心南源宗薫

また松ヶ岡文庫蔵の『耆舊帳』（写本）に記された妙心寺世代では「第一百十一世南源薫」（四丁表）とあり、妙心寺第一―一世として名を連ねている。

「南源臨濟録抄」では一丁裏から二丁表の頭注にかけて次のような南源に関する記事が細字で記されている。

南源恭薫禪師者、洛西正法山妙心寺、再住畢。是妙心開山大定聖應國師七世嗣悟谿宗頓、嗣獨秀乾才禪師、嗣仁岫宗壽禪師、嗣快川紹喜大通智勝國師、嗣南化玄興定慧圓明國師、嗣湖南宗嶽三舟圓觀禪師、嗣南源恭薫也。于時豫州松寄城主加藤左馬助嘉明候、與南源禪師懇和親、或日嘉明對南源、欲豫州松山城築、謀要點。師請迎而初引繩。旧湯築松寄兩城、移築今松山也。于時慶長八癸卯歲秋八月也。時藤候不忍見天徳寺宇荒廢、鐘魚瘖啞聲。遂相攸

今処。再三經營而一新、且附莊田百石并山林寺院、敷地免除諸雜費皆當霜而特屈請、再南源薰和尚焉。当江西山陰有櫻大樹、曰正月十六日花開。此東北皆山也。東尤巉嶮而高是夕陽之地、惠風晚矣。而年々正月十六日花必開矣。櫻名稱曰、扶桑初櫻、十六日櫻、老翁櫻、孝行櫻、車還櫻、白櫻、西行庵室櫻、天德寺櫻、天覽櫻、勅使櫻、節會櫻、二八兒櫻、延命櫻。齋明帝舒明帝臨幸、及勅使之橋。花守翁車還神。西行法師庵室之古蹟。存尚今。傳記畧于茲。これによると加藤嘉明は松崎城時代に南源と相見し、松山城築城計画について相談しており、その完成後に荒廃していた天德寺を再興したことがわかる。

ところでこれまで南源については、伊達政宗の帰依を受けて松島瑞巖寺を中興した雲居希鷹（一五八二〜一六五九）との密接な交流が知られている。すなわち雲居希鷹の年譜である『松島瑞巖中興大悲円満国師雲居和尚年譜』の元和四年の項では次のような記述が見える。

同四年、戊午。

師三十七歳。在三高城寺^一。（中略）去而遊方、徑^二往伊豫松山^一戻

止。天德寺南源爲^二舊知^一、懇接待。城主加藤式部少輔明成、聞^二師故^一信嚮、建^二寶樹新寺^一、爲^二師於開天祖^一。

（平野宗浄『雲居和尚年譜』五九一六〇頁）

雲居は伊予三谷の毘沙門堂で生まれ、九歳にして土佐太平寺で出家、その後住持の真西堂如淵とともに東福寺永明院に移り、関ヶ原の合戦の後は妙心寺派に投じ、妙心寺蟠桃院に入っている。三三歳で師の宇宙東黙より印可を受けるも、一所に定らず遍参し、三七歳のとき伊予

松山に入り、以後九年間聖胎長養していたのである。この雲居の伊予在居中、親交があったのがこの南源であった。南源を通じて城主加藤嘉明・明成父子との関係が築かれ、後に伊達政宗の帰依を受けることになったのである。

なお、『正法山宗派圖』に「南源宗薫」と記されていることから、この『雲居和尚年譜』をはじめ南源の法名を「宗薫」とする場合もある⁽²⁾。前述のごとく「南源臨濟録抄」の奥書では自ら「南源恭薫」と記しており、天德寺所蔵の諸文献にもほとんど「恭薫」と記されている。しかし「多幸山 天德禪寺秘事 大檀那河野氏并寺中結衆等靈簿」（以下「多幸山天德寺秘事」）に記される世代では「南源宗薫」とあり、天德寺側でも二つの伝承を有することがわかる。

四、「南源臨濟録抄」と天德寺蔵資料における天德寺の世代・歴史について

この「南源臨濟録抄」の冒頭一丁は次のような天德寺に関する記述が見える。

関西臨濟録鈔附屬聖應國師法孫寺譜傳之卷曰、曰、豫州道後多華山天德禪寺者、後村上天皇勅願之道場而興國二庚辰龍集春三月六日、當國司四條少將有資卿、同守護河野備後守兼彈正大弼越智宿禰通政等、受詔同鄉彌勒山定額寺移大伽藍。本尊正觀音立像。天平勝宝元年春三月僧行基受勅命、自作正觀世音之木造也。此寺天武九年四月例大寺、國司河野散位大夫越智宿祢玉純、依詔大伽藍彌勒寺建營、以官府治之。天長五年冬十月當彌勒寺預定額寺、同七年九月庚辰爲天台別院。爾來追年寺運衰微

矣。到于今年回復、臨濟宗關西之宰寺矣焉。安厝之遺蹟也。

開山主僧慧玄禪師、綸旨下賜、寺内東西拾三町餘、南北六丁餘。

敷地外、吉原郷大谷保内、浮穴郷高野保内、同郷田井保内、拜志郷別府庄内、合三百貫之地、御寄進并山門下馬、山内殺生、竹木等禁制之事、同年九月十八日也。又同年同月三日塔頭彌勒院外十七院、衆徒等、朝敵退散、御願成就、宝祚安泰、抽精誠云々、叡感之綸旨下賜、存尚今。当開山大定聖應國師、延文五庚子十二月十二日遷化。国守河野通定公、天授五年己未冬十一月六日桑村郡佐志久原合戦為細川氏討死。諡法號日勢院殿前豫州太守澹山了空大禪定門、通定者、備後守通綱之嫡子彈正、通言之嫡孫也。

天徳第二世授翁、康暦三庚申三月廿八遷化。天徳支院曰、彌勒、日勢、定額、法雲、禪定、雲門、義安、得善、圓滿、圓盛、大安、興禪、安城、了恩、景德、光明、大寂、淨福。文中三甲寅夏四月十日、有故、法王金輪覺理、在潜幸于當寺、依之、武田陸奥守信春、小笠原兵庫頭政長、以兵欲襲之。國守河野伊予守通定拒之。不免而敗走矣。于時伽藍兵燹、庫裡宝塔及塔頭十二院、灰燼矣。僅存者、仏殿及方丈開山堂、宝倉、鐘樓、山門、勅使門、惣門、筋土堀、及日勢、彌勒、定額、法雲、禪定、雲門也。而後明徳四年癸申四月廿五日有故四国管領細川家有沙汰、寺領悉被沒收。寺運衰替矣。後土御門院御宇延徳二年回復矣。

第三世無因宗因、應永十七庚寅年六月四日遷化矣。

第四世日峯宗舜、文安五戊辰年正月廿六日遷化。

第五世義天玄承、寛正三壬午年三月十八日遷化。

第六世雪江宗深、文明十八年丙午年六月二日遷化。

第七世悟谿宗頓、是迄皆從當寺洛西正法山妙心禪寺昇轉法嗣以為先例、爾後有故失之。

河野刑部太輔通宣公、延徳二庚戌年六月十七日再建、寺領回復。

主僧尊宿月湖禪師請迎、中興開山矣、是第八世也。第九世郭室融、

第十世徳應亭、第十一世樵岩榮、第十二世仙叟壽、第十三世南提玄竺、第十四世梅叟、第十五世叟就、第十六世南源恭薰也。

以上が「南源臨濟録抄」冒頭第一丁の記述であるが、この内容を概略するならば次のごとくである。すなわち天徳寺は天武九年(六八〇)に詔によつて河野玉純が弥勒寺という大伽藍を造営し、天長五年(八二八)十月には定額寺となり、同七年(六八二)九月には天台別院となつたが衰微した。その後南朝後村上天皇の勅願寺として興国二年(二三四)一三月六日に伊予国司四條資郷、守護河野通政が詔を受け、関山慧玄が綸旨を受けて住持として任ぜられた。当時の敷地は広大であり、彌勒院等の塔頭十七院を擁する大寺院であつた。しかしこの中興された天徳寺も文中三年(一二七四)には金輪覺理法王(長慶上皇)がこの寺に隠れていたところを細川方の武田信春・小笠原政長の兵によつて襲撃され、守る河野通定が敗走したため、伽藍の多くが灰燼に帰し、伽藍で残つたのは仏殿伝・方丈・開山堂・宝庫・鐘樓等、塔頭は日勢・彌勒・定額・法雲・禪定・雲門の六院のみであつた。さらに河野通定が天授五年(一二七九)に年桑村郡佐志久原合戦で細川氏に討たれ、明徳四年(一二九三)四月には細川氏の沙汰によつて寺領悉く没収となつた。しかし百年後の延徳二年(一四九〇)六月に河野通宣によつて回復されるところとなり、八世月湖契初を中興開山として迎え、第一六世

の南源に至った。

以上がこの第一丁目の記載内容に基づいて天徳寺の沿革をまとめてみたのであるが、この第一丁には書き込み頭注の形で次のような記述も見える。

関西臨濟録抄、追補集、聖應國師宝瑞鈔二曰、豫州道後多幸山刹院天徳寺草創之誌中ニ、人皇三十四代推古帝四年、法興六年冬十月歳在丙辰、詔シ玉フテ厩戸皇子ヲ以テ伊與國ニ趣カシム。国司散位大夫平致宿祢益躬、勅ヲ奉受シテ温泉郷ニ大伽藍ヲ造立シテ天徳山彌勒寺ト號ス。本朝建立四十六箇寺ノ一二例ス。天平勝宝元年春三月蒙勅行基律師、本尊正觀世音ノ木造、彫刻安置。天武帝九年四月、例大寺、国司散位大夫河野越智宿祢玉純、伽藍建立、以官府治之。天長五年冬十月預定額寺、同七年九月庚辰為天台別院。後村上天皇勅詔、惠玄禪師及国司四條少將有資卿、国守護河野備后守兼彈正大弼越智宿祢通政、多幸山之岡移大伽藍弥勒寺、山號改天徳多幸替、寺號用院號賜。山内東西十三町餘、南北六町餘寺領三百貫之地、御寄進山門下馬、山内竹木等禁制之札、以下畧。

この書き込み記述では推古朝のとき、聖徳太子が伊予地方に来て天徳山彌勒寺を建立したことが新たに見えるが、本文と大体同じ内容である。しかるにこの二つの記載内容でまず問題となるのが、本文冒頭の「関西臨濟録鈔曰」あるいは書込注の「関西臨濟録抄、追補集、聖應國師宝瑞鈔二曰」という部分である。これによると「関西臨濟録抄」や聖應國師関山慧玄の「宝瑞鈔」に当たるとも理解されるのであるが、

これまで関山慧玄に関する研究の中でこのような文献は報告されておらず、その存在すら疑問とせざるをえないところである。

こうした問題について松山天徳寺に所蔵される「天徳寺来由録集」なる写本に対応する記事があるので、以下に紹介したい。

関西臨濟録司寺院鑑初編附録曰、興州寺院草創三大寺起記之傳曰、人皇三十四代推古天皇御宇四年法興六年丙辰歳次、冬十月勅詔厩戸皇子伊與國三津行啓葛城臣高麗僧慧慈總二大法師供奉與國司散位平致宿祢益躬、共圖而三大寺建立、是伊與國寺院建營之初也。斯一在温泉郡熟田津之奥山井河上郷餘戸谷天徳山無量光院彌勒寺、訓見徳威縣神戸、就田津之奥野田井王楯、徳威山神護法水院西光寺。斯三和氣郡飽田津之奥泰山寺浦戸里安城山豫城院。是本朝四十六箇例大寺。各本尊阿彌陀如来安置、四溟泰平、國土安穩勅願所也。天武帝御宇白鳳九年庚辰四月成例大寺。扶桑史曰、国司散位大夫平智宿祢玉純、奉勅三大伽藍建營曰、弥勒西光豫樟以官符浴之。爲神宮司神龜五年戊辰秋八月廿三日天山古谷野徳威伊豫二柱出雲岡湯神六宮也。

この「天徳寺来由録集」は江戸期から近代にいたる諸写本を合冊させた雑集であり、必ずしも古い資料ではないが、この「天徳寺来由録集」による限り、「南源臨濟録抄」冒頭の「関西臨濟録鈔」とは元来「関西臨濟録司寺院鑑初編附録」であり、関山の臨濟録抄なる文献が存在していたわけではないことが知られるであろう。

また、この「南源臨濟録抄」冒頭の記載で注目されるのが天徳寺の世代の記述である。まず「開山主僧慧玄禪師」とあって開山が妙心寺

開山の関山慧玄とされ、その後六世までが妙心寺の世代と重なり（「天徳二世授翁」「第三世無因宗因」「第四世日峯宗舜」「第五世義天玄承」「第六世雪江宗深」、四派分流の四祖のうち南源の東海派の派祖悟谿宗頓を第七世とされている。しかしながら妙心寺開山関山慧玄はこの伊予天徳寺に住したのかどうか問題となるであろう。

この天徳寺の世代については、先に紹介した「天徳寺来由録集」の他、「多幸山天徳寺秘事」と外題された写本世代表があり、一丁表上部に次のように見える。

天徳 延文五庚子十二月十一日寂
開山 妙心開山大定聖應國師

また本写本はこの世代表の次に河野家の系図（「天徳寺大檀那豫州太守河野家御系圖」）を掲げ、第五丁表に「過去帖 江西山天徳寺」とあって、以下朔日から三十日までの廻向名簿が記されているが、この第五丁表の「過去帖」と記された右側に細字で次のような記載がある。

當寺ハ推古帝奉勅法興六年十月在歳丙辰聖徳太子來當温泉大伽藍
建立、國司散位平致宿祿益躬奉行號彌勒寺台門也。後哀廢因而後
村上帝奉勅興國二庚辰年三月守護代官河野通政移多幸山麓、號弥
勒院天徳寺、主僧奉迎大定聖應國師中興之開山為禪宗。

現在天徳寺ではこの南源恭薫を臨濟宗としての中興開山として、実質的な開山に位置づけているが、一方において後村上天皇の論旨に基づく関山慧玄の開山説も天徳寺側の諸資料に認められるので以下に検討したい。

そもそも妙心寺開山関山慧玄は没蹤跡の禪匠として語録を残さず、ほとんど伝記資料の手がかりとなる資料が残っていない。示寂後百年

以上も過ぎた応永元年（一四六七）に雪江宗深による「開山行実記」が撰述され、これが最も古い伝記ではあるが、雪江自身の弁にもあるように不十分なものであった。さらに近世には応禪普善創作ともいふべき『関山国師別伝』の説が流布し、混乱を生じていたのであるが、近年加藤正俊氏によって関山伝の批判的研究が進められ、その成果が『関山慧玄と初期妙心寺』（二〇〇六年 思文閣出版）として上梓された。これよって関山研究は飛躍的に進んだといえるが、この天徳寺住持については言及されていない。

また木村俊彦氏の「大本山妙心寺開山関山国師略年譜」によると、関山は暦応元年（一三三八 南朝延元三年）、六二歳で妙心寺に入寺し、康永二年（一三四三）、六七歳のとき、妙心寺焼失の後、浜松に妙心寺を別立して住しているが、問題の興國二年（一三四一）はその間のことである。

ところで、先に見たように「南源臨濟録抄」では「後村上天皇勅願之道場而興國二庚辰龍集春三月六日・「開山主僧慧玄禪師、繪旨下賜」とあるが、「天徳寺来由録集」には次のような論旨の写しが収められている。

後村上天皇御繪旨之寫
豫陽道後多幸山天徳寺住職之事所者 勅請也殊專佛法招隆可奉
祈 寶祥延長者依 天氣執達如件
興國二年庚辰三月六日 左少辨 有資（花押）

伊豫國道後多幸山僧侶可被抽 天長地久 朝敵退散 御願成就 寶
恵玄和尚禪室

祚安泰 精誠之狀如件

興國二年庚辰秋九月三日

左少將（花押）

天德寺衆徒等中

この繪旨の写しであるが、この九月の調査において副住職曾根弘充実師とともに天德寺蔵の諸資料を閲覽していたところ、先代住職で天德寺先住の曾根祖宏師が最も大切な資料として保管していた軸物（乾坤の二軸）のうち、乾の軸の最初に後村上天皇の繪旨（写し）を拝見することができた。

豫陽道後多幸山天德寺

住職之事所者

勅請也殊專佛法招隆可奉祈

寶祚延長者依

天氣執達如件

興國二年庚辰三月六日 左少辨 有資（花押）

惠玄和尚禪室

これは関山研究における新出資料であるとともに、南北朝の動乱期における伊予地方の禪宗の展開を考察する上で興味深い文献であるといえよう。

この「天德寺来由録集」の後村上天皇の繪旨に続く記載は次のごとくである。

後村上天皇興國二庚辰春三月六日奉 詔國師四條少将有資卿同守護河野備後守兼彈正大弼通政、同國温泉郷多幸山麓移大伽藍、改號多幸山天德寺。慧玄禪師受詔為開山主僧、繪旨賜下、寺内東西

拾三町餘、南北六町餘之敷地及吉原郷大谷保、浮穴郷高野保、同郷田井保、拜志郷別府庄、合三百貫、并山門下馬山内竹木殺生等禁制之事。同年九月十八日也。又同年同月三日塔頭弥勒院外十八院衆徒等、受詔、朝敵退散、御願成就、宝祚安泰、抽精誠云々。依勤行、叡感之繪旨賜下。天德支院十八、庵五、曰、弥勒、日勢、定額、法雲、禪定、雲門、義安、得善、圓滿、圓盛、大安、興禪、安城、了恩、景德、光明、大寂、淨福。庵曰、寒松、吸江、清光、大正、興聖。興國二庚辰三月六日有詔延元之乱、北國之役忠死靈魂慰祭永遠國威之典於爲令遺斯伽藍矣。北朝延文五、南朝正平十五庚子年十二月十二日。開山大定聖應國師遷化矣。

文中三甲寅年四月十日、有故、法王金輪覚理、在潜幸。武田陸奥守信春、小笠原兵庫頭政長、以兵欲襲之。國守河野伊予守通定、拒之、失利敗走矣。此時大伽藍兵燹羅、方丈、庫裏、宝塔、及塔頭十二院灰燼矣。僅存者、仏殿、方丈、開山堂、宝库、鐘樓、山門、勅使門、惣門、鎮守三社、筋土堀、及弥勒、日勢、定額、雲門、法雲、禪定耳也。

明德四癸申年四月廿五日、有故四國管領職細川家有沙汰、当寺領悉被沒收畢。因寺運衰替矣。

天授五己未冬年冬十一月六日河野彈正大弼通定、於桑村郡佐志久原與河野通勅共爲細川武藏守合戰敗死矣。又諡法號日勢院殿前豫州太守澹山了空大禪定門。是ハ御父通政公御法名ナリ。文中六年四月十二日德威原ニ於テ戰死ス。南朝天授六、北朝康曆二庚申年三月廿八日前住天德第二世授翁宗弼神光寂照禪師遷化矣。

この一文を前出の「南源臨濟録抄」の記述と比較検討するならば、若干の異同が見られるものの、ほぼ同文である。この「天徳寺来由録集」なる資料は、天徳寺側で伝えられてきたさまざまな伝承を書写してまとめられた資料であるが、前出の記事と同筆で天徳寺世代については三十一世の翠岩蘭和尚の天保三年までの資料が書き込まれているところから、書写年代は天保期まで下る資料ではある。しかしながら「南源臨濟録抄」の伝承と一致することは明らかであり、その内容は中世の伝承をふまえていると考えられる。

また「天徳寺来由録集」には「花乃隈遠音の轡 第五の卷」からの引用として次の一文も見える。

伊豫國道後天徳寺建立乃事。附河野家一門父子兄弟離散衰別。興
国二年庚辰春三月六日 後村上天皇 詔ありて當國湯月山イ築トアリの城主

河野彈正太郎通方イニ政トアリに命じて道後の屋形の北部多幸山の麓に大伽藍

を造らしめ本尊正觀世音菩薩の木像を安置せしめ是初め伊予国温泉郷弥勒寺の大伽藍を称資産号次号を改めたり。又天平十三年の昔し僧行基の自作一刀三札の靈佛なり。洛西正法山妙心寺の大定聖應國師を請迎開山の主僧となし國家安寧を祈らしめ猶又過る延元の冬春北國の役にて戦死をとげし通方が父祖父并小家の子郎徒等の靈魂を慰さめ祭らしめ給ふ所なり。多幸山彌勒院天徳寺と號して拜志浮名の兩郷内にて三百貫の地を御寄附彈正太郎通方ハ彈正太郎通言の子にして檢非違使武者所備後守通綱の為にハ嫡孫なり。通方成長して諱を通政と改め、父祖父の遺志を継ぎ始終南朝につかへ奉り義を金石よりも固くしばく軍忠をなしぬ。老て入道となり日勢院

に入給ふて法名を澹山了空と號。先帝覺理法皇を守護奉りて文中三年四月十二日徳威原に而討死。其男通定者細川武藏守の為に戦死。天授五年十一月六日桑木郡佐志久山ニ於テ河野讚岐守兼刑部太輔通直等西園寺公俊共也。亦通直公者天徳寺殿五代御祖にして西園寺公俊卿得能右馬頭通定二公者御妹智也。(後略)

このように「天徳寺来由録集」には、後村上天皇の綸旨によって関山慧玄が天徳寺主僧として招かれたことが繰り返し述べられている。これについては今後さらに慎重な考察が求められるが、これまでの関山の年譜の空白部分を埋める資料ではないかと思われる。ともあれ古代の天徳山彌勒寺の寺基を道後湯築城の北方の多幸山に移転し、臨濟宗天徳寺開山として妙心寺より関山慧玄を迎えたことは四国地方における臨濟宗妙心寺派の展開を考える上で大きな意義を有することであろう。

ところで関山以後の天徳寺の世代については、「南源臨濟録抄」では前述のごとく「天徳第二世授翁」「第三世無因宗因」「第四世日峯宗舜」「第五世義天玄承」「第六世雪江宗深」「第七世悟谿宗頓」と記しているのであるが、これはいかなることであろうか。授翁以降の妙心寺派の僧たちがこの伊予天徳寺に住したという記述は『正法山六祖伝』等の妙心寺派の僧伝類には見当たらないのである。

しかるに、この「南源臨濟録抄」の記載についても、天徳寺側の資料において対応する文献が存在する。前出の「多幸山天徳禅寺秘事」なる写本には、各紙の上下に世代が次のように記載されている。

天徳延文五庚子十二月十二日敕
開山 ○妙心開山大定聖應國師

中嗣湖南嶽前月桂二世
天徳開山南源宗薫和尚

天徳康曆二庚申三月廿八日
二世授翁宗弼神光寂照禪師

中興南源天徳二世蘭叟紹秀和尚

天徳応永十七庚寅六月四日
三世無因宗因興文圓慧・

同上嗣湖南宗嶽江西寺開山
天徳三世明堂宗證座元

天徳文安五戊辰正月廿六日
四世日峰宗舜禪源大濟・

同上嗣南源恭薫前月桂二世
天徳中興雲岩全祥和尚

天徳寛正三年三月十八日
五世義天玄承大慈慧光・

同上嗣舟山宗毘
天徳五世懶翁玄康首座

天徳文明十八年六月一日
六世雪江宗深佛日真照・

同上嗣古峯宗順
天徳六世月宗元珠座元

天徳九月六日
七世悟谿宗頓大興心宗・

同上嗣月宗玄珠
天徳七世真岩宗實座元

獨秀乾才禪師八月七日

中興南源和尚嗣鐵帝宗州
天徳八世興源宗右座元

仁岫宗壽禪師

同上嗣興源宗右
天徳九世遺忘祖言座元

快川紹喜大通智勝國師

同上嗣鐵帝宗州
天徳十世靈叟指空和尚

南化玄興定慧圓明國師五月廿日
鰲山景存蘭叟紹秀

湖南宗嶽三舟圓觀禪師正月七日
明堂宗證

南源宗薫禪師月桂二世
日勢院殿前予州太守澹山了空大禪定門

天徳文中二年己四月十二日浮穴郷徳威原合戦河野通政自殺

雲岩全祥禪師月桂三世
舟山宗毘

善光寺殿淨山天授五年己未冬十一月六日戦死
散位從四位下彈正太郎兼伊予守越智宿祿通

大安知瑞月桂四世
前住妙心鰲山景存和尚蘭叟紹秀

月桂五世嗣富山中興雲岩祥老和尚法
古峯宗順前住萬壽舟山宗毘禪師
懶翁玄東

鐵帝宗州月桂六世

中興南源天徳十世再中興

靈叟指空月桂七世
瑞應宗圭和尚

月桂八世篁谷宗貞和尚
層崖月桂九世現住

この「多幸山天徳寺秘事」に見える世代の記述は天徳寺十世の靈叟指空まで記されているところから「南源臨濟録抄」以後であるが、天徳寺側では関山を開山とし、南源を中興開山として実質的に南源を祖とする世代となっていることが理解される。問題は妙心寺二世授翁以下の世代であるが、天徳寺の歴住として位置づけるには無理がある。実質的には関山示寂（延文五年（一二三六〇）後、十数年を経た文中三年には荒廃し、三〇数年後の明徳四年（一二三九三）には細川の沙汰によって廃絶していたのである。この世代について結論的に述べるならばこれは南源に至る法系、すなわち悟谿宗頓下（東海派）の快川紹喜―南化玄興―湖南宗嶽―南源恭薫と相承する法系が、中興された天徳寺以前の世代として加えられたのである。こうした経緯から前述の資料に「天徳二世蘭叟紹秀」の上に「中興南源二世」と記されているように、天徳寺では実質的には南源から世代を数えていくことになったのである。

ところで「南源臨濟録抄」では、七世の悟谿に続いて第八世として中興開山として「月湖禪師」「第九世郭室融」「第十世徳應亭」「第一世樵岩榮」「第十二世仙叟壽」「第十三世南提玄竺」「第十四世梅叟」「第

十五世叟就」と次第して、第十六世として南源恭薫となっている。実はこの中興八世から南源の前の十五世までは曹洞宗の僧である。

これは明徳四年（二三九三）四月の四国管領細川氏の沙汰により「寺領悉被没収」という事態によって一旦廃絶となり、これより約百年後の延徳二年（一四九〇）に河野通宣の時に寺領を回復して再建された時には曹洞宗寺院であったことが理解される。

ちなみに、これらの曹洞系の僧たちの曹洞宗の系譜によって次のように確認される。⁽³⁾

「月湖禪師」|| 月湖契初（隆慶寺〔愛媛県今治市米屋〕四世、龍穩寺〔松山市御幸〕開山）

「第九世郭室融」|| 廓室清融（隆慶寺五世、雲祥寺〔松山市味酒町〕開山、龍穩寺二世）

「第十世徳應亭」|| 照巖永亨（徳翁永とも、大雄寺六世、西光寺開山）

「第十一世樵岩榮」|| 樵巖良永（龍穩寺四世）

「第十二世仙叟壽」|| 僊叟良寿（龍穩寺五世）

「第十三世南提玄竺」|| 南提玄竹（龍穩寺六世）

「第十四世梅叟」|| 梅叟寿芳（龍穩寺七世、大雄寺九世、西竜寺〔松山市持田町〕開山、広島県宗光寺開山）

「第十五世叟就」|| 中叟文就（龍穩寺八世）

天徳寺の「中興開山」と記された月湖契初は曹洞宗でもいわゆる峨山派で通幻下の石屋真梁を派祖とする石屋派に属する。石屋派は鹿児島福昌寺が中心寺院であるが特に周防竜文寺・長門大寧寺を拠点としてに西日本各地に展開した派である。この天徳寺も中世末期の再興時

には石屋派寺院（竜文寺〔山口県徳山市〕の系統）であったのであるが、この八代の歴住が天徳寺の近隣の龍穩寺（月湖契初開山）の世代と重なることが注目されるであろう。しかしその後寺勢が衰え、近世初頭加藤嘉明が伊予に入り、南源恭薫を迎えて臨済宗の寺院として開堂し再び隆盛に至るのである。

このように天徳寺は推古朝に創建された弥勒寺を前身として、興国二年に道後北の多幸山の地に天徳寺として中興されて関山慧玄を迎えて、曹洞宗月湖による中興、そして南源による中興といった歴史をたどっており、実質的な開山である南源以降でも「天徳寺秘事」の世代に見たように四世雲岩全祥が中興、十世靈叟全祥の再中興とされている。

五、南朝史研究における天徳寺関連資料について

さて以上のように天徳寺は後村上天皇の繪旨にみるように南朝との関係の深い寺院であった。

「南源臨済録抄」には「衆徒等、朝敵退散、御願成就、宝祚安泰、抽精誠云々、歡感之繪旨下賜存尚今」と記載されているが、この記事に対応する箇所が「天徳寺来由」に次のような写しが残されている。

豫州道後湯上余戸谷天徳山弥勒寺僧侶等、天地長久、朝敵退散、御願成就、宝祚安泰、可被抽精誠之状如件

元弘三年癸酉四月廿三日

無量光院弥勒衆徒中

尊良（花押）

尊良とは後醍醐天皇の皇子である。南朝側の繪旨にしばしば諸寺院

に対して祈禱を命じたり、謝意を示す論旨が出されているが、これもその一つであろう。

これらの天徳寺関係資料は南北朝史研究においても興味深い資料であるといえよう。特に文中三年四月十日に法王金輪覚理が天徳寺に隠れ、武田信春、小笠原政長の軍勢に襲撃され、河野通定が敗走し、伽藍が焼失したという記事は、天徳寺が後村上天皇の論旨以来、南朝方の拠点となった寺院であることを示している記事である。この法王金輪覚理とは南朝の長慶上皇のことであるが、従来の南朝史研究において、この長慶上皇の晩年のことは不明とされており、たとえば森茂暁氏は『南朝全史 大覚寺統から後南朝へ』（講談社選書メチエ）において次のように述べている。

長慶上皇の薨去については、『大乘院日記目録』応永元年（二三九四）八月一日条の「大覚寺法皇崩ず、五十二、長慶院と号す」という記事によって、応永元年八月没、享年五二歳とされている。逆算すると、生年は興国四年（二三四三）、在位中の年齢は二六〜四一歳ということになる。長慶上皇の晩年の動向を伝える史料はなく、どこでどのように没したのか不明である。長慶上皇の陵墓として前述の「嵯峨東陵」が指定されたが、確たる証拠があるわけではない。長慶上皇の別称を「慶寿院」というが、この称が長慶上皇の皇子である海門和尚承朝が止住した天龍寺の塔頭慶寿院にちなむこと、および長慶上皇も最終的には入洛したであろうことからみて、その居所が慶寿院で、没後はその供養所であったろうから、慶寿院の跡地である当所に指定されたのである。長慶天皇

の晩年の住地や終焉の場所など、学問的にはまだ未解決の問題が少なくない。（二一〇頁）

このようにこれまで不明であった長慶上皇の最晩年の動向と終焉について天徳寺史料が伝える内容は、南朝史研究において重要な意味をもっているのであるが、特に重要な資料としては、天徳寺蔵の「芳闕嵐史」なる写本が挙げられよう。これは南朝の重臣たる四條家が一門の忠君の事跡を興国年間から宝徳年間にかけて記録した資料で、天徳寺写本は慶長元年の南源恭薫による書写本とされるが、幸いこれが平成十三年長岡悟氏によって全文紹介されるに至り、この長慶上皇に関する記述も明らかになったのである。当該記事は次のとおりである。

二十三 徳威ヶ原の戦い 長慶院崩御の事

これより随従の武士には、猶も心を碎き、元中三丙寅の年正月の初めより、法皇には温泉郷湯の北、多幸山天徳寺弥勒院に潜匿せし給うて、軍謀御企て怠らずありしと、また、同じ處に潜み給うは御心もとなしとて、安養寺に遷し秘かに忍び給いにけり。

二月の中頃徳威三島の宮にも遷り忍び給う。

また、三月の中ころより久万の山中は要害の地なりとて、菅生の山の辺りなる大宝寺の理覚坊に潜み居り給うとぞ。

この頃、將軍義満公は、筑紫の宮方を討ち平げ給わんとて、其勢十万余騎にて進発なるべき最中なれば、当国へも武田、小笠原に七千余騎を差し副え宮方の押えとして向わせらる。

国中のものを上を下へと騒がしく、今にも合戦の始まるならんと、その用途嚴重にぞ聞こえける。

元中三年三月の末つきた、小笠原勢は東予の方に攻め入らんとて、四月八日、道前道後の境なる中山、十門、大熊、文台、赤嶽の諸城を抜き取らんと戦うところに、毎度寄手は敗北しあれば、ここに武田勢は宇和、喜多の地を固めて、九州への道を閉したりしが、小笠原勢を援けんため、御井津へ責め入る。

元中三己巳四月十日、南方の公卿、武臣の輩の立て籠りたるころの、多幸山天徳寺の伽藍を焼き、つぎに宝巖、安養両寺の伽藍を焼き去り、横谷越え正観寺及び旗寺の伽藍を焼き払い、久米岡に於いて南方勢と血戦、征南宮傷を負い本陣へ引き給う。

得能新左衛門尉通資、楠次郎左衛門尉正盛、太田三郎左衛門尉入道延真以下二十八名討死をぞしたりけれ。

寄手は此の勢に乗り、河野伊予守が立籠る湯の奥城に攻め寄せる、寄手敗北して堀江浜に引き退く、一手は星岡に戦う南方利を失い、平井明神の鼻城に、また、戦うと雖も寄手烈しきこと急に於て、遂に徳威原に退き激戦し、法皇傷を負せられる。

同十二日、法水院神宮寺に入り崩御給う。

これを徳威の岡 南山へ葬し奉る、殉死の大将は通政以下和田、北畠の面々なり。

長岡悟氏はこの長慶上皇に関して伊予の伝承・史跡を踏査した上で、本書の「あとがき」にて考察されており、⁽⁵⁾南朝史研究に新たな資料を提示したといえよう。しかしながら長慶天皇の行実については、さまざまな伝承が伝わっているにもかかわらず、⁽⁶⁾徳威ヶ原合戦における長慶院崩御の事績はほとんど言及されていないようである。また、伊予

地方史研究においてもこの伝承については特に歴史的研究所の対象になつてこなかったようである。たとえば『予章記』等の史料もこの事績に触れておらず、資料的に孤立している状況であり、この伝承については慎重に検討されるべきであろう。ただ伊予の寺院の古文書にも長慶天皇に関する史料が残っており(今治市玉川町光林寺文書)、今後長慶天皇に関する新出資料の発見が待たれるところである。

六、「南源臨濟録抄」の成立について

次にこの「南源臨濟録抄」が成立する前提となつた南源恭薫の臨濟録の講義はいつのことであつたのであろうか。幸い天徳寺には「南源薫和尚年譜」(写本)が所蔵されている。その奥書には「八世遠孫住江西不肖 宗勸 纂輯 九世遠孫住月光不肖 禪諾 校閲」とあるので、天徳寺十三世蔵山宗勸によつて編集され禪諾の校閲を経て成立したことがわかる。しかしながらこの年譜は語録から法語などを抜粋して記されており、行実について不明な点も多い。主な記事を取り上げるならば次のごとくである。

永祿 八年(二五六五) 甲州にて誕生。

慶長 三年(二五九八) 湖南和尚の印可證明を受ける。

慶長 八年(二六〇三) 秋、松山城主加藤嘉明に迎えられ、天徳寺へ晋住す。

慶長一三年(二六〇八) 大龍寺殿本嶽常心大禪定門小祥忌に拈香す。

慶長十七年(二六一二) 春、臨濟録を評唱す。

慶長一九年(一六一四) 海岸山岩屋寺に赴き詩作す。

元和 二年(一六一六) 南化国師の十三回忌に拈香す。

元和 四年(一六一八) 臨濟録を講ず。

元和 六年(一六二〇) 湖南和尚、月桂寺にて示寂。

元和 七年(一六二二) 月桂寺に赴く。

元和 七年(一六二二) 湖南和尚一周忌に拈香す。

元和 八年(一六二二) 妙心寺に再住す。

元和 八年(一六二二) 元旦、妙心寺にて祝聖上堂す。

三月九日、見慶軒にて示寂す。

右に見るように年譜の慶長十七年(一六二二)の項に「春 師評唱臨濟録、其本之尾記事焉。其本尚在江西」とある。これは前述の「南源臨濟録抄」の奥書に「慶長十七年壬子四月十日南源恭薫記之」とあった記述と一致するのであり、この臨濟録抄が蔵山の頃には天徳寺にあったことが推測される。

なお、この「南源年譜」の元和四年(一六一八)の項にも「四年戊午師又講臨濟録」とあるので、南源は祖録のうち、臨濟録の提唱を得意としていたことが伺われる。

さて以上のように天徳寺中興開山の南源恭薫によって同寺において臨濟録の講義がなされ、会下の書写によって抄が成ったのであり、その成立過程を把握するのに、ある程度の情報を得ることができたのである。こうした点からみて本写本は中世末から近世初頭にかけて撰述された一連の臨濟録抄の成立過程を考察する上で貴重な新出資料であるといえるであろう。したがって「南源臨濟録抄」と他の臨濟録抄と

を比較対照させてながら検討する必要があるが、これについては機会を改めて論じてみたい。

註記

(1) 『駒沢女子大学研究紀要』第8号、一―二五頁。なお臨濟録抄の資料紹介の他に、臨濟録の密參録についても大徳寺派・妙心寺派・幻住派に分類して考察した。

(2) たとえば『雲居和尚年譜』では「南源」を「南源宗薫は快川紹喜の法嗣、南化玄興の法嗣、湖南宗岳の法を嗣いだ人である。加藤嘉明の師で、伊予松山城は南源の設計によるという。」(一六一頁)と注記している。

(3) 『曹洞宗全書』「大系譜」七八七頁参照。

(4) 長岡悟『芳關嵐史』附『南山霞抄』(宗) 天真会発行、平成十三年

(5) 長岡、前掲書、二四七―二五三頁。ただし長岡氏は徳成ヶ原の戦いの年号について写本に「文中三年」とあるところを「元中三年」と訂正しているが、文中三年とすべきであろう。

(6) 長慶天皇の事績に関する先行文献としては、①三輪義熙『長慶天皇紀略』(大正十三年、博進館)、②笹原助『長慶天皇御紀伝』(大正十五年、精文館書店)、村田正志『長慶天皇と慶寿院』、④庭田暁山『私本長慶天皇と児島高德太平記』(昭和五十二年、児島高德公顕彰忠桜会)などが挙げられる。

①の『長慶天皇紀略』では応永一七年二月二日五七歳で富士山阿祖谷で崩御とあり、『芳關嵐史』の文中三年説であると、長慶天皇は三

十代前半での崩御となり、元中二年九月一〇日付の高野山宸筆願文の事績などと矛盾する。『国史大辞典』では応永元年（一三九四）八月一日に五二歳崩御の説を伝えている。

長慶天皇の御陵については昭和一五年に京都嵯峨角倉に決定されたが、①山梨県富士谷説、②青森県弘前市浪岡紙漉沢説、③和歌山県九度山町丹生川玉川の里説、④富山県南砺市安居 安居寺説、⑤青森県名久井岳麓の有未光塚など、各地に伝承があり、近年には愛媛県東温市牛湫に長慶天皇陵の記念碑が建立されている。

〔追記〕本年一月二七日に再び天徳寺にて調査をさせていただいたが、その際愛媛大学の川岡勉教授より軸装された後村上天皇の繪旨が写しであることをご教示いただいた。また伊予地方史を研究なさっている田中弘道氏（松山市在住）から①月湖契初開山の龍穩寺の所在、②『芳關嵐史』翻刻本の徳威ヶ原合戦の年代（「元中三年」ではなくて「文中三年」）であることを示唆いただいた。（平成二十年二月一日）